

「主体的な学び」を促すユニバーサルデザインの授業モデル

過程	ユニバーサルデザイン		主体的な学び		
	項目	思考を支える指導・支援	能動的	学習者	深い
授業前	学級内の理解促進	互いの理解を促進し、安心して活動できる雰囲気をつくる。			
	学習ルールの設定	曖昧なことが苦手でも安心して活動できるように、学習ルールを決めておく。			
	見やすい・聞きやすい環境の設定	集中して取り組めるように、掲示物、板書、机上及び音など、見えるものや聞こえるものを整理する。			
	場の構造化	物の配置などを固定化して整理整頓し、教室内を機能化する。			
	時間の構造化	単元の流れなどを提示し、今後の見通しをもたせる。			
導入	学習内容の視覚提示（視覚化）	見せ方を工夫し、本時の学習への意欲を高め、全員が参加できる活動を仕組む。	○		
	本時の流れの確認・ めあて の提示（焦点化）	活動内容、活動の流れ、活動目標、解決すべきことを身近な生活に結び付け、イメージさせる。	○		
	肯定的な評価	取り組もうとしていることを肯定的に評価し、意欲を高める。	○		
展開	モデルやヒントの提示（視覚化・共有化）	やり方等の理解をそろえ、解決できるイメージをもたせる。	○		
	観点や視点の提示（視覚化・焦点化）	教材・教具の示し方を工夫し、観点や視点に気付かせ、考える内容を方向付ける。	○	○	
	動作化・作業化	身体を使わせることで、表現に気付かせたり理解を深めさせたりする。	○	○	○
	学習形態の工夫（共有化）	ペアやグループによる話し合い活動等で、言語化させ合い、理解を深めさせる。	○	○	○
	肯定的な評価	取り組んでいる過程をスモールステップで評価し、意欲を持続させる。	○		
終末	振り返り での言語化（視覚化・共有化）	めあてに対し、発言させたり書かせたりして振り返らせることで、できたことを実感させる。			○
	肯定的な評価	自己評価・他者評価・相互評価等により、できたことや課題を認識させる。	○		
授業後	既習事項の掲示（視覚化）	既習事項を想起・活用させ、本单元のみならず、他教科等においても活用させる。			○

「能動的」…能動的な学び 「学習者」…学習者基点の学び 「深い」…深い学び

項目の解説

【授業前・導入】

過程	項目	解説
授業前	学級内の理解促進	<p>ペアによる話し合い活動など「学習形態の工夫」を行うためには、児童生徒が互いの理解を促進し、安心して活動できる雰囲気が必要である。</p> <p>また、学習形態を工夫することで、学級内の理解促進を図ることも並行して高めていくことが適切である。</p>
	学習ルールの設定	<p>発表の仕方などの学習ルールを決めておくと、児童生徒は発言しやすい。</p> <p>また、こだわり等により、曖昧なことが苦手な児童生徒は学習ルールがあると安心して活動できる。</p>
	見やすい・聞きやすい環境の設定	<p>掲示物、板書及び机上进行を整理すると、視覚情報の重要な部分が明確になり、児童生徒の注意を向けやすくする。</p> <p>また、「聞く」ことに課題のある児童生徒が、集中して聞くことができるよう、聞こえるものを整理することが必要である。</p>
	場の構造化	<p>物の配置などを固定化して整理整頓し、教室を機能化すると、児童生徒は指導者の指示がなくても準備等を行いやすくなる。</p> <p>また、このことは、刺激を調整することにもつながる。</p>
	時間の構造化	<p>見通しをもつことが苦手な児童生徒は、単元など、今後の流れが分かると落ち着いて活動しやすい。</p>
導入	学習内容の視覚提示 (視覚化)	<p>導入時に、学習内容に関連した興味・関心のあるものや意外性のあるものなどを提示したり、一部を隠して予想させるなどして視覚化したりすることは、児童生徒の注意を喚起しやすい。</p> <p>また、児童生徒に対して、自分たちで課題を発見させることは、課題解決への意欲につながりやすい。</p> <p>なお、全員が参加できるような活動から導入すると、児童生徒の意欲が継続しやすくなる。</p>
	本時の流れの確認・ めあて の提示 (焦点化)	<p>活動内容、活動の流れ、活動目標、解決すべきことを身近な生活に結び付け、イメージさせる。常に行うパターン化された活動、活動の流れの提示があると、見通しをもって活動しやすくなる。</p> <p>また、授業で最終的に身に付けさせたい学習内容などを焦点化し、めあてとして提示しておくことは、児童生徒の学習へのイメージ化を図ることにつながる。</p>
	肯定的な評価	<p>児童生徒が学習に取り組もうとしていることを肯定的に評価すると、児童生徒の意欲を高めることができる。</p>

【展開・終末・授業後】

過程	項目	解説
展開	モデルやヒントの提示 (視覚化・共有化)	<p>活動開始時にやり方等が分からない状態が、一定時間続くと、児童生徒は意欲を失いやすい。</p> <p>モデルやヒントで視覚化し、友だちと共有化させ、やり方等の理解をそろえて、解決できるイメージをもたせると、活動しやすくなる。</p>
	観点や視点の提示 (視覚化・焦点化)	<p>観点や視点を示すことで、考えたり話し合ったりしやすくなる。</p> <p>教材・教具の示し方を工夫して視覚化し、観点や視点に気付かせ、方向付けると、児童生徒の取組課題が焦点化され、児童生徒は考えやすくなる。</p>
	動作化・作業化	<p>身体を使わせることで、表現に気付かせたり理解を深めさせたりしやすくなる。</p> <p>相手の気持ちや状況を理解しにくかったり、「聞く」ことだけではイメージしにくかったりする児童生徒が実感しやすくなる。</p>
	学習形態の工夫 (共有化)	<p>ペアやグループによる話し合い活動等では、児童生徒は積極的に意見を述べやすい。観点や視点の提示があると、なお、活発に活動しやすい。</p> <p>言語化することで思考を整理するとともに、共有化することで学習を深めることができる。</p> <p>また、衝動性のある児童生徒が、一旦、意見を述べることで思考を整理しやすくなる。</p> <p>ただし、「学級内の理解促進」を併せて取り組む必要がある。</p>
	肯定的な評価	<p>取組の結果だけでなく、取り組んでいる過程をスモールステップで評価すると、意欲が持続しやすい。</p>
終末	振り返り での言語化 (視覚化・共有化)	<p>授業の始めに提示した「めあて」に対し、発言させたり書かせたりして振り返らせ、視覚化・共有化すると、児童生徒は、学習したことが明確になりやすい。このことは、児童生徒にできたことを実感させやすい。</p>
	肯定的な評価	<p>取組の結果だけでなく、取り組んでいる過程をスモールステップで評価すると、意欲が持続しやすい。</p>
授業後	既習事項の掲示 (視覚化)	<p>既習事項を掲示するなど、視覚化することで、前回の学習内容を想起・活用させやすい。このことは、本単元のみならず、他教科等においても活用させることができる。</p>